

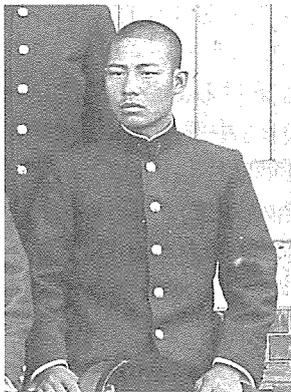
同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高農 第13回生・片倉（倉島）恵： 盛岡高農時代とその後の歩み（13）

若尾 紀夫（C昭39・院41）

北水会報 第127号の「鈴木梅太郎教授と盛岡高農得業生たち」で片倉（旧姓・倉島）恵について取り上げたが、その後、新條計吾氏（A昭24）から「回想録 片倉恵先生」及び「片倉恵先生五十周年忌 記念誌 波の音」を紹介して頂いた。これらの資料は、片倉 恵が兵庫県立淡路実業学校に在任（昭和15年～23年）中の教え子等が出版したものである。ここで、改めて片倉 恵について紹介する。

盛岡高等農林学校時代



農学科第2部入学時
（大正4年4月）

片倉（倉島）恵（明治30年9月10日～昭和24年8月28日）は、静岡県磐田郡（現・磐田市）の出身、大正4年3月に静岡県立農学校（現・静岡県立磐田農業高等学校）を卒業後、同年4月に盛岡高等農林学校農学科第2部（後の農芸化学科）に入学、宮澤賢治・成瀬金太郎・

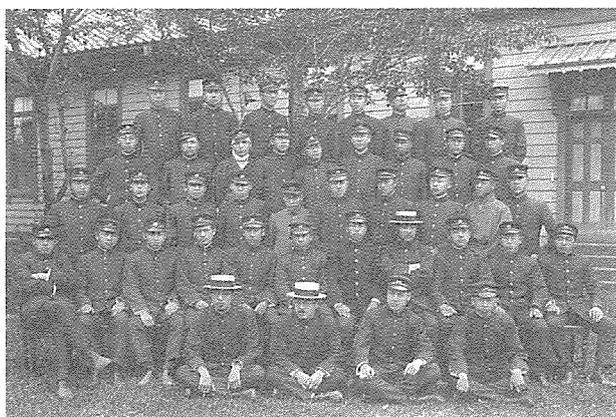
小菅健吉・塩井義郎等と同期（第13回生）である。農学科第2部2年生（12名）が、夏休み（大正5年8月）に賢治を中心として実施した盛岡附近地質調査では、■班（雫石川流域：太田・本宮・飯岡）（原勝成・倉島 恵・山本延雄）を分担した。また、大正6年度盛岡高農校友会委員として倉島 恵は庶務部、賢治は徳育部に所属していた。盛岡高農では農学及び農芸化学の当時最先端の学問を学び、大正7年3月に優秀な成績で卒業したが、何故か倉島 恵の得業論文は残されていない。当時、得業研究は必須ではなかったので論文を提出しなかったのであろうか。

鈴木梅太郎研究室時代

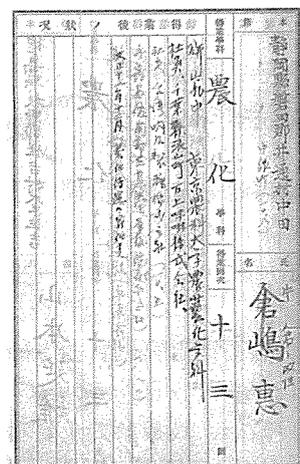
大正7年4月に鈴木梅太郎教授に囑望されて東京帝国大学農科大学農芸化学科介補として鈴木研究室に入り農芸化学の研究に従事、3年間の研究生活を送ることになる。当時、鈴木教授のもとには多くの優秀なエリートが集まり様々な研究を展開していたので、鈴木研究室に入ることは、ある意味大変難しい研究者の道であった。

研究成果として、鈴木梅太郎教授との連名の研究

論文「諸種蛋白及脂肪類の栄養価に就て（第2報）」があり、著者は鈴木梅太郎・片倉 恵・岩田元兄・他3名である。岩田元兄（前号で紹介：静岡県駿東郡御殿場町）は、片倉 恵と同じ静岡県立農学校を卒業し、大正5年に盛岡高農農学科第2部に入学、大正8年に卒業した後輩（第14回生）で、後に日本農学会賞を受



盛岡高農校友会委員（大正6年3月）
片倉（倉島）恵（最後列左2人目）、宮澤賢治（3列左4人目）



片倉 恵の得業後の状況

賞した。両人は鈴木研究室で共同研究をしていた。

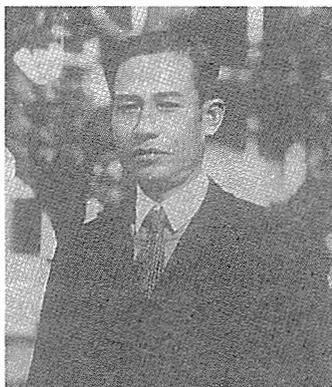
参考資料

民間会社員時代

東大農科大学鈴木研究室に約3年間在職後、大正9年10月31日に依願退職。一時期、千葉県流山市万上味味(株)社員となるが、大正10年4月には台湾明治製糖(株)に入社、約半年で退職する。

農学校教職時代

会社退職後は、兵庫県の農学校教職の道を一貫して歩む。大正10年11月19日(24歳)：兵庫県佐用郡立農蚕学校教諭(8年間)、大正12年12月：奏任待遇に昇任、昭和4年8月26日：兵庫県立上郡農学校教諭(5年間)、昭和9年8月8日31日：兵庫県立三田農林学校教諭(6年間)、昭和15年3月30日：兵庫県立淡路実業学校校長(第2代校長)(8年間)、昭和17年9月8日：勲六等・瑞宝章受章、昭和23年10月30日：兵庫県立篠山農業高等学校校長(10ヶ月)、昭和24年8月28日：逝去(52歳)。



農学校教職時代
(50歳：昭和22年5月)

このように片倉 恵は、大正10年、24歳で農学校教諭となり昭和24年に亡くなるまでの約28年間、文字通り農学校教育に献身した。その農学校教育者としての揺るぎない生涯、その背景には彼自身が学んだ静岡県立農学校と盛岡高等農林学校の存在があろう。奇しくも、賢治も、25

歳(大正10年12月)で稗貫郡立稗貫(後の花巻)農学校教諭になり、大正15年3月に退職(30歳)している。

新條計吾氏(兵庫県淡路市在住)には貴重な資料を寄贈して頂きました。厚くお礼申し上げます。

- ・盛岡附近地質調査報文：校友会報 第33号、1-16(大正6年3月16日)
- ・諸種蛋白及脂肪類の栄養価に就て(第2報)：鈴木梅太郎・奥田 讓・松山芳彦・沖本玉三・片倉 恵・岩田元兄、東京化学会誌 第41号、381-413(大正9年3月)
- ・回想録 片倉恵先生：編集並発行責任者：清水 進・新條計吾(平成6年1月)
- ・片倉恵先生五十周年忌 記念誌 波の音：片倉恵先生顕彰会(代表：清水 進、事務局：新條計吾)(平成11年3月)